
未来トリップ

yuzu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来トリップ

【NZコード】

N6415Y

【作者名】

YUZU

【あらすじ】

田を覚ますとそこは10年後の未来。

かつこいい旦那と可愛い娘ができた。

だけど、旦那から離婚届を渡されて・・・。

ハイブリッドールの罠

チリンチリンと耳元で煩く鳴る田舎まし時計を止め、私はまだ開かない目を擦りつつ仕方なく起き上がる。

まだ7時か。眠たいな・・・。

いやいや、高校生になる訳だし。4月の初めは肝心だよね。心機一転した気持ちで清々しい朝を迎えよう！

気分良く一日を過ごす為にもここにはフレンチトーストとフルーツを食べようっと。

お母さんまだ寝てるだろ？。しおりがない。私が朝食を作るか。

トントンと軽快な音を立てながら階段を降りると、キッチンから香ばしい香りのするコーヒーの匂いが漂ってきた。

あれ？お母さん、もう起きてるのかな？

と少し不思議に思いながらもキッチンへと足を運ぶ。

そこには台に乗つて朝食の準備をしている可愛らしい女の子と新聞紙を広げてコーヒーを飲んでいるかっこいい男性がいた。

「あ、葵さん。今日は早起きですね。おはようござります」

と手際よく料理をしながら私に向かつて丁寧な挨拶をする女の子。

すかさず私も朝の挨拶をする。礼儀には礼儀をつくさなければ。

実際に礼儀正しい上ないのだが、私は女の子と面識がなかつた。

しかし、ここは我が家。つまり私の家の住民なのだろう。おそらく親戚の子どもを今日から預かっているのだと思つ。私は聞かされていないが。

まあ、女の子はいいにしても、ここにいる男性はどうなたでしょう。

女の子は礼儀正しく挨拶をしてくれたが、男性は新聞紙から田を離そうともしない。

その態度に少々ムカツとした。初対面の時の挨拶は重要でしょうが。だけど、見た目20歳前後の年上の男性に礼儀がなつとらんとは怒れないでの、眼鏡をかけた整った男性の顔を睨みつける。

憶測でしかないが女の子と顔が似ているところをみると女の子と年の離れた兄妹だろう。何らかの事情で一人を我が家で預かっていると推測する。

「はい、準備できましたよ。ほら、パパは新聞紙を置いて。葵さんも席についていただきましょう」

「・・・いただきます」

――パパ！？父親？お父さん？ファザー？ダディ？

まさか・・・いくら童顔にしても20歳くらいの男性の娘が5歳くらいの女の子なんて・・・一体何歳の時の子供ですか。

「葵さん・・・どうしたんですか？」

いや、そういう下世話な話は止めておいた。

並々ならぬ深い事情で我が家にやつてきたんだね。

こんな小さな女の子が丁寧な言葉使いをする必要があるべきの日より谷より深い事情が。

「ううん、ここにいる間は私が女の子のお姉ちゃんだ！」

「うん、なんでもないよ。・・・あれ、私のだけフレンチトーストとフルーツだ」

二人の朝食はポテトサラダとスクランブルエッグとトーストと実にシンプルなメニューである。

「葵さんは毎日フレンチトーストとフルーツじゃなきゃ嫌って」

ん？いつもは普通に食パンだけだったはず。今日はたまたまフレンチトーストとフルーツが食べたかったんだけど・・・まあいいか。

「おー、これ記入したら出しどけ」

一度も皿を合わせなかつた男性が「ちらりを睨むように何か薄い紙を差し出す。

離婚届。

誰と誰が離婚するのだろう。片方だけ走り書きのように雑な文字で記入されている。

その名前は柏原拓真と書かれていた。

もしかしたらと思ったが、自分の両親の名前でないことにホッとした。

どこかで聞いたことのある名前のような・・・はて？

「パパ、これ何の紙？」

「俺とここの離婚届だ。お前は俺が連れていくから安心しろ。新しい部屋はもう決めてある」

「こいつってどういつ？いや、男性が女の子に分かりやすく指を差したことわかるよ、うん。

ただ理解したくないといつも現実逃避といつも。

どうして指が私を差していくのかな。

人に指を向けちゃいけませんって習つていらないのだろうか。

「つーん・・・あたしは葵さんと・・・ママと離れなくちゃいけないの？」

「やうだ。こいつとは他人となる。もう家事を押し付けられなくて済むぞ。子どもらしく外で友達と遊んでいいんだ」

「・・・友達と遊びたいけど、ママと離れたくない」

「敬語をつかわなくちゃいけない母親と、ギスギスした生活を送りたいのか。お前はまだ子どもなんだ。子どもは子どもらしく健やかに過ごすべきだ」

「それでも・・・それでもママと一緒にいたいのー葵さんだけがわたしのママだもん」

「我が儘言つなー今日の毎日は出るからな

「我が儘じゃないもん！パパが勝手なんだもん！あたしは絶対ここから出ない」

男性が女の子の顔めがけて手を振りかぶった。

その時、身体が勝手に動いて二人の間にに入った。

女の子を守るように庇うと、頬へ容赦のない痛みに頭が揺れる。頭が真っ白になつて身体が倒れそうになつたが、両足で踏ん張つて女の子を庇つた。

庇わなくちゃいけない。私の子どもだけは絶対に。

女の子に当たつていたら軽い子どもの身体なんてすぐに吹き飛ばされていたことだろう。

「なに本氣になつて子どもを叩こうとしているんですか」

ジンジンと頬が痛む。また叩かれるかもしれない。それでもこの馬鹿な男性に怒鳴りつけたかった。

なんで可愛い我が子を叩こうとするんだ馬鹿が。

「—————」

私が間に入つてきて戸惑つたのか、初めて迷つた顔を見せた。その顔を今にも殺さんばかりの殺意を込めて睨む。

「うわああああああああああああああん」

女の子が盛大に泣き始めた。これはこの大馬鹿な男性が全面的に悪い。

男性に冷ややかな軽蔑の眼差しを向ける。

「・・・」めん。俺が悪かつた

男性は不器用に女の子の頭をポンポンと撫でる。

おい、私には謝罪無しか！素で無視かよ、こんちくしょー。

「お前はこいつといったらいい。俺が出て行けば丸く収まる話だつた。
でもな、俺はお前と一緒にいたかつたんだ」

男性が優しい顔で柔らかく笑つた。少しだけ切なそうに。
その顔を見たことがある既視感。初めて会う男性なのに。
そう、昨日初めて会つた男の子もこんな顔をしていた。

――3月31日。中学生も卒業して長い春休み。

つい先日誕生日を迎えたばかりだが、春休み期間中のせいで親と親友にしか誕生日を祝つてもらえないことが葵には不満だつた。
せつから桜も咲いて綺麗だつていうのに公園で花見の席取りを一人
なんてついてない。

一人で甘酒を飲んで桜を眺めるというのも風流でいいけどさ。

一人よりは二人のほうがいいに決まつてる。

だいたいなんで中学も卒業したのに中学校の制服で集まるんだつ
ーの。ただの痛い人だよ。

知り合いに見つかつたらどう言い訳すればいいのさ。なにが今日で
最後だよ。卒業式で制服とはさよならしたじやん。

もーなんでもいいから早く誰か来てよ。私一人制服なんて恥ずかし
いよ！

そんなとき、制服を着ている一人の男の子がやつてきた。

おろしたてで新品のぶかぶかな制服を着た男の子。私が卒業した中
学校の制服。

新鮮な気持ちになつた。私も入学当初はあんな感じで初々しく恥ず
かしいような誇らしいような気持ちで制服に袖を通した。

今私はどうだろう。初々しさもなく誇らしい気持ちもない。ただ

ただ制服を着ていることが恥ずかしかった。

でも、もう今後この制服は着られない。

3年間共に過ごした思い出のいっぽい詰まつた制服とおよならだ。

そう思ふと胸が詰まつた。ぎゅっと制服を握り締めボロボロと涙を流した。卒業式だって呆氣なく終わつて涙が流れなかつたつていうのに。

「…………」

「大丈夫ですか？あの……これ、どういえ」

そう言つて折り畳まれたハンカチを差し出してきたのはあの制服姿の男の子。

驚いてハンカチと男の子の顔を交互に何度も見る。男の子は徐々に顔を赤くして恥ずかしがつていた。ハンカチをポケットにしまおうとした手を両手で止めた。

「ありがとう。『めんね、変なところを見せちゃつて』

「い、いえ、差し出がましいとは思つたんですけど、あなたはそんな風に笑つた方が可愛いです」

年下の男の子にこんなサラッと可愛いと言われたのは初めてだつた。男の子に借りたハンカチで涙を拭き取つていたが、一瞬で涙が引いた。思わず顔が赤くなる。

「かわ、可愛いなんて、そんな……。ハンカチありがとう。洗つて返すね。同じ制服だから同じ中学校の新入生つてことは分かるん

だけど、名前聞いてもいいかな?」「

「僕は柏原拓真って言います。よろしくお願ひします、先輩。先輩の名前を聞いてもいいですか?」

「私は綾瀬葵。でも、もう先輩じゃないんだ。卒業しちゃってね。来週からは成徳高校の新入生。拓真君と同じピカピカの一年生。これから楽しみだね」

「はい。楽しみですね」

拓真君は桜が散るのを惜しむよつた切ない微笑みを私にくれた。私は桜が羨ましくなった。

こんなに似ているのに同姓同名の赤の他人なんてあり得るだろうか。拓真君が10歳年取つたらこんな男前になるのだろう。

拓真君に借りたハンカチは昨日洗濯したあとアイロン掛けで机の引き出しにしまつたはず、早く返さないと。

「あの・・・あなたは私が昨日ハンカチ借りた拓真君?なんか随分年を取つたみたいだけど」

そう言うと男性はすぐ驚いていた。口を大きく開いて呆然とした顔を見せた。

論より証拠だと思い、私の部屋の机の引き出しから拓真君のハンカチを取り出し、まだ涙を流している女の子の為にも私のハンカチを持つて行つた。

「はい、昨日はハンカチありがと」

黙つて考え込むように男性はハンカチを受け取る。

私は女の子の目線になるよう座つてハンカチで優しく涙を拭き取る。女の子は皿を真つ赤にしてうれやさんのように可愛かつた。

「あ、ありがとうございます、葵さん」

「ううん、私はあなたのお母さん・・・ママだよなっ・ママつて呼んでほしいな」

まだよくわからない。私が間違つているのか、世界が間違つているのか。

どうやら私は一人未来に来たみたいだ。

今日は4月1日。エイプリルフールのドッキリなら早く明日になつて本当のこと教えてほしい。

エイプリルフールの罠②

女の子が泣き止むまで私達は食卓に座つて無言で待っていた。
ちょうどよく考えたいことがあつたから無言も苦痛ではない。
女の子と男性の会話を回想してみると、どうやら私は女の子の母親
で男性の嫁・・・。

―――つ嫁！？妻？奥さま？ステディ？ハニー？

ステディは恋人だつけ。えー、私結婚しちゃつてんのか。
だけど、離婚届を渡されたな、はは。笑えねえ。

昨日、初めて会つた同じ中学校の新入生だつた拓真君。
それが今日男性は10年後の拓真君の姿と判明。

1日にして皆が10歳年を取つたのか。それとも私一人10年後の
未来にきたのか。
それにしても記憶にない今までの私はずいぶんひどい母親だつたら
しい。

5歳くらいの娘に家事と私に敬語を強要していたなんて・・・虐待
もいいところだ。

そんな母親を慕つている女の子。見てて切なくなるくらい良い子だ。
両親が勝手に離婚しようとして離れ離れになるのを一生懸命引き止
めた。

記憶がない以上、ちゃんとした母親になれるかわからないけど、我
が子を精一杯育てていこうと誓う。

ようやく女の子が泣き止んだのを見て私は重い口を開いた。

「私はつい昨日まで15歳でした。その15歳もつい最近誕生日を
迎えたばかりです。正直、私は結婚したことも子どもを産んだこと
も嘘なんじやないかと思つています。ですが、女の子は我が子だと

わかります

「記憶喪失……か」

「……葵ちゃんママはあたしのこと覚えてないの？パパのこと覚ったのに……」

「――う。私は、ずっと娘ができたら葵から名前を取って愛にしようと決めていたんだ。何回記憶がなくつても愛の名前だけは絶対に忘れないよ」

「……う。ぐすり」

また涙を流す愛。だけど、泣いているのに嬉しそうな顔を見て心からホッとした。
もう愛を悲しませたくない。

「記憶喪失となつた原因がわからないな。昨日も二つも同じだつたと思うが。一度病院に行く必要があるか」

「その前に教えてほしいんですが、今、私は何歳ですか？」

「ああ、25歳になつたばかりだ。ちょうど10年間の記憶がないみたいだな。俺は22だけどあと3日後に23、愛は4歳だ」

「やつぱり……10年後の未来つてことですね。20の時に産んだってことかもしかして父親は違う人ですか」

「はつ、残念なことに俺が18歳の時お前に騙されてできた子だ」

嫌味つたらしく私にだけに聞こえるよつ囁き、厭な笑みを浮かべる。

目は笑っていない。

それでもさつきまでの存在を無視された状態ではなくって良かつた。

ただ心は痛い。昨日の心優しかった拓真君はいないのだと認めたくなかった。

エイプリルフールの罠③

「心因性健忘症ですね。心因性とは人間関係のストレスが原因で起ります。ある一定期間の記憶喪失のことを部分健忘と言います。あなたは今その状態なのでしょう。治療には麻酔分析療法と催眠療法がありますが、今日治療されますか？」

「いえ、いいです。ありがとうございました」

私の了解もなしに勝手に返事をする大人版拓真君。
私と話すときは違う、八方美人な笑顔。外面のいいことです。

これ私に言ってくれてなんだよね？私が返事した方がいいんじゃないのかな。まあ、いつか。

そんなことより病院は保険証が必要だから本人確認のために保険証を見たわけですよ。

本来なら名前は綾瀬葵、生年月日は昭和 年3月28日って書かれてあるはずなのに・・・。

病院つてあれだよね。ナースさんがフルネームで呼ぶから私が柏原葵だっていうことも愛に言われなきやわからなかつたよ。

そう、保険証は正確だつた。私の名前が柏原葵に変更されていること以外は。

結婚したら苗字が変わったことすっかり忘れてた。

そういうふうして拓真君は私のこと嫌いなのに結婚したのかな。聞いたら教えてくれるといいな。

病院から帰宅して保険証と診察券を財布に仕舞うと、大人の女性ら

しくセンスのいいブランド物の財布の中から私の取った覚えのない免許証が出てきて吃驚した。

何が一番驚いたって誰でも犯罪者に[写るつて評判の顔写真に[写る私。18歳らしき私の顔は悪女だった。

悪女、髪が茶髪でクルクルなうえに化粧バツチリの厚化粧女。素朴で没個性な私の顔が写るはずなのに別の誰かのように思えた。誰だこの女。

18歳で悪女なら25歳の私はどんな顔に。

恐くなつて急いで洗面台の鏡を覗き込むと、そこには。。。

薄い眉、キツい目尻、シャープな顎、髪はストレートの黒髪。

黒目が大きくて猫みたいなドロップ型な目は元々そんな目だったからいいとしても、この顔は化粧したら小綺麗な大人の女になるんだろうけど生意氣で性格悪そう。。。

髪が黒髪のはいいね。やっぱり社会人たるもの清潔感のある黒髪が一番。

問題は25歳になつたらスッピンのまま外出ちゃ駄目つてことね。眉が薄過ぎて心許ないよ。前髪下ろして隠しておこうつと。

あら、やだ。前髪長すぎ。ここは思い切つて剃刀で。。。

あ、やっぱ。切り過ぎた。ま、まあ、パツンていいと思うな、うん。。。美容院行くか。財布の中に行きつけっぽい美容師の名刺をつけたことだし。

ちょっと前髪を弄りながらリビングに行くと、二人は驚いた顔を見せた。

「えつ、ママ。どうしたの、その前髪？」

「へ、うん。ちょっとしたイメチェンかな」

「来週から仕事だぞ。そんな変な前髪でいいのか」

「明日、美容院に行きます！」

―――
グサツ

わ、私だって変だつてわかつてもん――！

「ママ、可愛いよ――いつも顔から髪やんのママは綺麗でいいね――
って言つてくれたけど、あたしは今のママがいいな」

な、なんて可愛いことじゅう一いつの子が宇宙――可愛い――

「ね、パパも今のママ可愛いよね？」

「お前の方が可愛いよ」

優しい顔で愛の頭を優しく撫でる拓真君。

自分の娘を口説いてやがるこのローラー。ひとつひとつを見てくれてもいいと想つんだけどな。
はつ、もじかして口づけ。

「ローラーじゃねえから」

「ですよね。何故心読まれたし。意外といつも見てくれてるのかも。
なーんだ、素直じゃないだけか。そう思つてこの小憎たらしい顔も
愛おしく。

「キモいからこいつを見んな」

死ね！こいつへん死んでこい！

惨たらしく死ね。ミンチになつて死ね、てこいつか殺す。

「ね、パパ。それをシ、シンドリカ？ シンティーレ？ こいつは？」

「誰だ！ 可愛い我が子にオタク用語なんて教えた奴は！
シンドレってなんだつけ。愛にはデレ、私にはシンの状態のことと言つてましたつけ。」

「シンドレじゃない。こいつが嫌いなだけだ」

「ならーー一度ちゃんと聞きたいと思つてしましましたけど、どうしてセコ
まで私を嫌つてるのに私と結婚したんですか？」

「それは・・・愛がいたから。愛がいなきゃ誰が結婚なんかするか」

「なら、どうして今日離婚しようとしたんですか？ 愛が嫌がる」と
わかつてたでしょ」

「それが愛のためだと思ったからだ。虐待する母親から無理やり
も引き離した方がいい」

「私は虐待しません！ 認めて下さーい、もう今までの私じゃありませ
ん。愛のためにちゃんとします。お願ひですか？ 愛のためにも家族
を離れ離れにしないで下さーい」

「・・・・・・わかつた。記憶が戻るまでは離婚の話は保留にして

おぐ。それでいいな?」

「はー、もううんです」

私と拓真君と愛の共同生活が始まった。
色々なことがあったからきっと一人ともエイプリルフールだつて気づいてないんだろうな。
私は気づいていても嘘つくるのが苦手だから言わなかつたけど。

旦那様の誕生日

10年後の世界に来てから3日経った今、4月4日。

4、つまり死を意味する日だ。不吉な予感がする。

今日、何かあつたような・・・まあ記憶にないってことはたいして重要でもないか。

愛が私の服の裾をクイクイと引っ張つて内緒話するように私の耳に手を添える。

「あのね、今日、パパに内緒でサプライズバースデーパーティーしよー」これからケーキとプレゼント買いに行こつ、ね?」

もちろん可愛い我が子に可愛くお願ひされたらとえ地獄でもお供しますとも!

で、誰の誕生日だつて?私は誕生日過ぎたばかりだし、愛は2月14日に誕生日でしょ。

「『めん、愛。誰の誕生日?』

「もう、パパの誕生日でしょ。確か23歳になるつて言つてたよ」

愛はわかりやすく紅葉みたいに可愛い両手で左に2本、右に3本立てた。

うん、32本口ウソク貰つか。嫌がらせです。

「あたしはもうパパの誕生日プレゼント貰つたけど、ママはまだでしょ?」

「ああ、そうだね。しょがないな、盆栽でも買つか」

「パパは育てないと思つよ？」

嫌がらせパート2です。絶対あげても嬉しくないプレゼントをあげてやる。ああ、子供っぽいさ。精神的に15歳だからな！

「パパはね、結構可愛いものが好きだよ。ヒントはあたしも大好きなもの」

「よし、わかつた！ とりあえず「パート」行こつか」

来ましたヨロデパート。

デパ地下には色鮮やかで美味しそうなケーキがたくさんある。さて、どんなケーキにしようかな。

やつぱりチョコレートケーキでシックにいくのもいいけど、ショートケーキの生クリームと苺のコラボもいいし、チーズケーキの濃厚な味わいも捨てがたい。

「うーん、愛は何のケーキがいい？」

「あたしはね、フルーツたっぷりのケーキがいいな！」

フルーツケーキもシャンパン2本と子供用のシャンパン1本を購入したことだし、お次はキッズコーナーでせいぜい可愛いプレゼントでも買いましょうか。

「・・・ママ、違うよ。パパはベビーグッズ特に好きじゃないよ。

えつと、世界的に大人気なキャラクターだよーヒント2は東京ネズミハンドにいるよ

「ああ！ はいはい、あれね。あのネズミね。でも、黒いネズミってのは黒死病をもたらすから。よくない象徴だから」

「・・・そんなことないもん」

「あ、うん、そうだよねー黒いネズミ可愛いよねーうん、黒いとこうとか」

「黒いネズミじゃない方が可愛いのーあたしは白い女の子のネズミの方が好きだもん。パパは黒い男の子のネズミの方が好きだけど」

「鼠色の双子ネズミがママ好きだなあ」

そうだ！ 家族で黑白鼠色ネズミたちのぬいぐるみでも買おうかな。
また別にプレゼント買うか。そうだ、あのがいい。

パンパンパーーン

拓真君が扉を開けた瞬間、私と愛はクラッカーを一斉に鳴らす。
タイミングばっちり！ 拓真君は煩そうに顔をしかめたが、それでも机に置かれている豪勢な食べ物の数々に今日が何の日か思い出したようだ。

「そりゃ、今日は俺の誕生日か」

「パパ！ お誕生日おめでとうーほー、これどうぞ

「お、黒いネズミのキーホルダーか！ありがと。鍵につけておく
な」

えへへと照れたように笑う愛を拓真君は抱っこをした。
り、理想的な家族愛だ。あー、やつぱり普通のプレゼントにしてお
くべきだったか。

「ママとね、ケーキとプレゼント置いたんだよ！フルーツケーキは
あたしが選んだの」

「やうか。それじゃあ早く食べよう！」

私には普通に無視つと。こころ、こころ。いろんなものが箱に捨て
てやる。

「ママもパパにプレゼント渡したって！一緒に選んだんだよ！」

「はーまさか……」

無言で手を差し出す。顔は無表情だ。

私もいやに緊張して無表情でプレゼントを手渡す。

長方形のボックスのリボン結びをゆっくりと解いて……。

バ———ン

「拓真君、23歳の誕生日おめでとうー！」

「うわっ……いた」

昔流行った箱を開けるとバネのように飛び出してくるファンキーな
ぬいぐるみ。それが見事拓真君の頸にアッパーを繰り出した。

大成功！くふふと抑え切れない笑みが口から洩れる。

キツと鋭い目でこちらを睨んでくるが、仄かに涙目だったことに気
分を良くして思う存分腹を抱えて笑い転げる。

愛は大きな音に驚いて私の笑い声にまた驚いて、徐々に私の笑いに
釣られて愛も可愛く笑う。

拓真君は呆れたように見ていたけど、口元が自然と笑っていたのを
私は見逃さなかつた。

その日は笑顔の絶えない一日となつた。

黑白鼠色のネズミたちの家族を大きいソファに置いた。

拓真君は黒いネズミを愛は白いネズミを私は鼠色の双子ネズミを抱
いて一緒にDVDを観たのだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6415y/>

未来トリップ

2011年11月20日11時20分発行